

ゲーテの『スイス旅行』における自然観察について
— 旅の文化史 —

野原章雄

Zur Naturbeobachtung in Goethes Schweizerreise
— Eine Kulturgeschichtsseite der Reise —

Akio Nohara

Goethe ist ein Dichter, der gern Reisen gemacht hat. In seinem Leben ist er etwa zweihundertmal, natürlich einschließlich langer und kurzer Reisen, auf Reisen gegangen. In fremden Ländern sah er das Menschenleben und beobachtete die Natur. Er kannte auch die Geschichte und die Landesverhältnisse im Ausland. Durch die Reisen hat er viele Erfahrungen und Erlebnisse haben können. Dadurch entstanden viele Dichtungswerke und Reisebeschreibungen. In Italien z.B. führte er noch viele Zeichnungen aus. Goethes Dichtung hat durch seine Reisen an Reife gewonnen. Er ist dreimal in die Schweiz gereist, ausschließlich Durchfahrt durch die Schweiz. Auf dieser Reise hat er an allem in der Natur Interesse genommen : Gestalt und Lage der Gebirge, Täler, Bergpässe, Gesteine, Boden, Flüsse, Seen, Wolken, Nebel, Wind, Sonne, Mond, Sterne und Pflanzen. Das, woran Goethe besonders Interesse auf den Reisen hat, wird in dieser Abhandlung erwähnt : Wasserfälle, Gesteine, Wolken

Farben, Pflanzen, Gebirge, Täler und Bergpässe, denn seine Naturbeobachtung dient später der Gestaltung der Szenen im "Faust".

ゲーテは旅を好む詩人であった。異国の人々の暮らしを見、自然を観察し、詩を書き日記をつけたり、風景の素描をした。それで多数の見聞や体験を著した。イタリア旅行のような大きなものは言うまでもなく小旅行を含めると生涯にゲーテはおよそ200回近くの旅をしている。スイス旅行では彼は自然界の森羅万象とも言えそうなものに関心を向けていた。山脈、谷、峠の形態とその位置、岩石、土壌、川、湖、植物、空気、雲、雪、風、霧、太陽、月、星等にわたった。

スイス旅行には最晩年に完成をみた『ファウスト』第二部における山岳描写を髣髴させるものが見られる。この意味においてこの旅行はゲーテの単なる自然観察にとどまらないで次なる作品の調査と資料収集をかねたものであろう。第1次と2次のスイス紀行はゲーテ本人の手になるものであるが、3次のはエッカーマン (Johann Peter Eckermann, 1792-1854) がゲーテの遺品の中から編集して1833年に刊行されたものである。

I. それぞれの旅程の概要

1) 第1次スイス旅行は1775年5月14日にフランクフルトを出発して70日後の7月22日に戻ったものである。その同行はゲーテの若い頃の友人のシュトルベルク (Friedrich Stolberg, 1750-1819) 伯爵とハウクヴィツ (Christian August Haugwitz, 1752-1831) 男爵である。この5月14日にダルムシュタットでメルク (Johann Heinrich Merck, 1741-

1791)に会い、彼に同行してマンハイムへ行く。メルクはゲーテのスイス旅行をメフィスト・フェレスのような白い目で見ていた。しかしゲーテはこの陸軍士官にして文筆家、批評家、芸術家の後援者、古生物学者、製図家、工場主でもある彼から少なからぬ文学上の影響を受けていたこともあり、異議を唱えることはなかった。

17-22日までハイデルベルクとカールスルーエに滞在している。この間に辺境伯のカール・フリードリヒ (Karl Friedrich, 1783-1853) の邸宅でのレセプションにもゲーテは招待されていた。ザクセン・ヴァイマル大公のカール・アウグスト (Karl August, 1757-1828) とその花嫁のルイーゼ (Luise, 1757-1830) にも会っている。23日には1770年4月から71年8月まで遊学したシュトラースブルク市へ行く。ここでゲーテはレンツ (Jakob Michael Reinhold Lenz, 1751-92) の訪問を受ける。さらにアウグスト公とも再会している。

5月28日：レンツと一緒にバーデンのエメンディングゲンに住んでいたゲーテの妹のCornelia (Cornelia, 1750-77) とその夫のSchlosser (Johann Georg Schlosser, 1739-99) を訪ねる。

6月6日-9日：フライブルクを経由して、このあとシャフハウゼン→コンスタンツ→ヴィンタートゥールへと行く。

9-15日：チューリヒに滞在した。この町ではLavater (Johann Kaspar Lavater, 1741-1801) をゲーテは訪ねる。さらにBodmer (Johann Jakob Bodmer, 1698-1783) のところへも行ってた。その後1788年にゲーテがヴァイマルに招いた画家であり銅版画家のLips (Johann Heinrich Lips, 1758-1817) ともここで知合いになっている。このチューリヒで予期せぬ出会いもあった。フランクフルトの少年時代の友達であったKaiser (Ph.Chr.Kaiser) とPasabant

(J.L.Passavant) に会った。ラーヴァーターはゲーテのシルエットを素描画家のシュルツ (Schulz) に製作させている。

15日：チューリヒ湖にゲーテは馬車で行く。アインジイーデルンの修道院へは徒歩で行った。

16日：パサバント氏とシュヴィーツへ行く。

17日：リーギ山に登る。

19日：フィアヴァルトシュテッテ湖へ出かけ色彩豊かなこの湖の印象をスケッチしたり地質学の観察をしていた。

21日：ゲシェネン→アンダーマットを經由してホスピーツへ行きゴットハルト峠に登る。

22日：この峠からイタリアへの境界の眺望をスケッチする。帰途につく。

6月26日－7月6日：チューリヒに滞在する。シュトルベルク兄弟と別れる。

7月8－9日：バーゼルに滞在する。歴史家のイーゼリンと銅版彫刻家のメヒエルと知合いになる。

12日：シュトラースブルクに着く。

13日：ここの大聖堂に上った時のことをゲーテは散文頌歌「エルヴィンの墓へ3度目の巡礼」として書く。医者で大衆哲学者のツィンマーマン (J.G.Zimmermann, 1728-1795) と知合いになっている。ゲーテは彼とはこれまでに手紙のやり取りはしていた。彼はゲーテにシュタイン夫人 (Charlotte von Stein, 1742-1827) の1枚のシルエットを見せる。ゲーテはそれを見てラーヴァーターの骨相学 (Physiognomik) 上の考えから映し出された人の本質的な特徴を推論するのであった。シュパイア→ハイデルベルク→ダルムシュタットを經由して帰る。ダルムシュタットではヘルダー

(Johann Gottfried von Herder, 1744-1803) と再会していた。

22日：ヘルダーと共にフランクフルトに行く。この旅行中にゲーテは多数のスケッチを描いている。

2) 第2次スイス旅行の記述は1779年10月3日の日曜日の夕方、ミュンスターから始まる。しかしこれ以前の9月12日にゲーテはアウグスト公の侍従で上級営林監督官のヴェーデル (Otto Joachim Moritz von Wedel, 1752-1794) と共にアウグスト公のお伴をしてヴァイマルを出立している。

9月14-17日：カッセルに滞在する。方伯のギャラリーで古典古代の美術品を見学したり、世界を旅行してまわっているフォルスター (Johann George Forster, 1754-1794) と知り合いになったりする。

18-22日：アウグスト公とフランクフルトのグローサー・ヒルシュグラーベンのゲーテの両親の家に宿泊する。

23日：ハイデルベルクに行く。ここで崩れかけている望楼のスケッチをした。

25日：シュトラーズブルクの近郊のゼーゼンハイムのブリオン家族を訪問する。フリーデリーケ・ブリオン (Friederike Brion, 1752-1813) との和解に努める。

26日：ゲーテは1775年の最後のフランクフルト時代に恋をしたリリー・シェーネマンをシュトラーズブルクに訪ねる。

27-28日：エメンディングゲンのシュロサー家を訪問し、さらに1777年6月8日に歿した妹のコレネーリアの墓参をした。

29日：出発。フライブルク、バーゼル、ビール、バルンを經由して行

く。

10月8日：トゥーンに到着する。

9日：ラウターブルンネンに行きシュタウプバッハの滝を見物する。この滝を見て「水の上の霊たちの歌」(Gesang der Geister über den Wassern)を書く。

11日：グリンデルバルトの氷河を見る。

14日：トゥーンに戻る。

15-19日：ベルンに滞在する。

20-23日：ローザンヌに滞在してブランコーニ (Maria Antonia von Branconi, 1746-1793) と知り合う。

27-11月2日：ジュネーブに滞在してデンマークの画家のイエンス・ユエル (Jens Juel, 1745-1802) に肖像画をかいてもらう。

28日：チューリヒのラーヴァーターに手紙を書く。

11月3-6日：シャモニに滞在する。

12-14日：ザンクト・ゴットハルトに滞在する。

16日：ルツェルン泊。

18-12月2日：チューリヒのラーヴァーター宅に滞在する。当地ではデッサン画家であり銅版画家のリップス (Johann Heinrich Lips, 1758-1817) に肖像画を描いてもらう。作家で学者のボードマー (Johann Jakob Bodmer (1698-1783)) を訪問するが冷淡な応対をうける。

12月2-8日：ヴィンタートゥールを経てボーデン湖畔のコンスタンツに達する。シャフハウゼンに向いラインの滝を見る。

11-18日：シエトウツガルトに滞在してカール・オイゲン公 (Karl Eugen, 1728-93) のもとに泊る。

15日：ゲーテはこの旅のお伴をしたカール・アウグスト公と共にシラー

ゲーテの『スイス旅行』における自然観察について

(Friedrich von Schiller, 1759-1805) が生徒であったカール学校 (Karlsschule) を訪問して、ここでゲーテは初めてシラーに会う。

19-20日：カールスルーエに滞在する。

21-23日：マンハイムに滞在して「クラヴィーゴ」(Clavigo) の上演をみる。

25日：フランクフルト着。

30日：ダルムシュタット着。

31日：大晦日をディーブルクで迎える。

1780年1月1日：ダルムシュタット着。

2-4日：ホムブルクに滞在する。

6-9日：フランクフルトに滞在する。

10日：フランクフルトを出発する。

13日：ヴァイマルに帰着する。

3) 第3次スイス旅行

1797年ゲーテが48才の時に企てたもので8月から11月にかけて実施されている。ゲーテは今回の旅行に臨んで前の2回のものとは異なる心構えを持った。つまり客観的にものを観察する態度と探求心を抱いて出た。旅行の記録を集めて旅行作品を出版することも計画に入れた。日記、旅先からの手紙、短かい記事の類であった。全行程中ゲーテは地質学、鉱物学、風景の特徴、農耕、人口、町の施設、建物、個々の地域の歴史等について日記に詳しく記入する。そのために書記のガイスト (Ludwig Geist, 1776-1854) を同行させた。

7月25日：アイゼナハ、フルダを經由して母親のいるフランクフルトに

向った。

27日：ハーナウで地質学、鉱物学の教授のレオンハルト（Karl Casar von Leonhard, 1799-1862）を訪問する。

28日：フランクフルト着。

29日：夕方にヴィースバーデンに到着する。

8月15日：リュエデスハイムに宿泊する。

16日：ピンゲンの聖ロッフス祭に行く。ゲーテは自分が描いた下絵をマイヤー（Heinrich Meyer, 1759-1832）とザイトラー（Luise Seidler, 1786-1866）に仕上げさせた聖者の絵をロッフス礼拝堂へ寄進した。

9月1日－8日：ヴィンケルのブレンターノ（Franz Brentano, 1765-1844）の別荘に滞在する。ブレンターノ家はフランクフルトの著名な商家であった。

12日：ヴィースバーデンからフランクフルトへ行き秋の見本市を見る。シュロサー家に泊る。

16－18日：トゥトリンゲンを経由してシャフハイゼンに行く。ラインの滝を描写する。チューリヒへ向う。この町ではシュルテス（Barbara Schultheß, 1745-1818）とその兄のラーヴァーター（Johann Kasper Lavater, 1741-1801）を訪問する。ゲーテは1782年から知り合いとなった歴史家のミュラー（Johannes Müller, 1752-1809）と会う。

21日：シュテーフア出身の既述の画家で美術史家のマイヤーと共にシュテーフアへゆく。

22－27日：マイヤーのイタリアでの下絵とこの旅行中に描いたものの点検に明暮れる。

28日－10月8日：シュヴィーツからアルトドルフを経由してザンクト・

ゲーテの『スイス旅行』における自然観察について

ハルトに徒歩旅行する。帰りはアルトドルフからツークを経由してチューリヒへ戻る。鉱物類を採集してくる。その途次に「ウィリアムテル」の伝説を叙事詩にする着想が浮かぶが実作に至らず。後にこれはシラーに戯曲化を委ねることになる。

8-21日：シュテューファに滞在する。

21日：シュテューファからヘルリベルクに向う。

22-26日：チューリヒに滞在する。バルバラ・シュルテスと彼女の婿で司祭をしているゲオルク・ゲスナーと再会する。

26日：シャフハウゼンに泊る。

27日：トゥトリンゲンに泊る。

29日：チュービンゲンに泊る。

11月1日：チュービンゲンからエヒターディングン→シュトウツガルト→グミュント→エルヴァンゲン→ディンケルスビュール→シュパーバッハへと移動する。

6-15日：ニュルンベルクの士官のクネーベル (Karl Ludwig von Knebel, 1744-1834) の家に滞在する。

16日：エアランゲン→バンベルク→クローナハと通過する。

20日：イエナでシラーに再会する。マイヤーと共にヴァイマルに到着する。

II. 自然観察

ゲーテの関心をひいたこの3回の旅のうちで小論においては「滝」・「岩石（鉱物）」・「雲と色彩」・「植物」・「山と谷」に注目してみたい。

(1) 滝

1) 第2次の旅行でゲーテ一行はバーゼルからビルス川 (Birs) に沿ってベルンに行った。その先はローザンヌ→ジュネーブに出て、アルヴ川 (Arve) に沿ってシャモニに行く。海拔2,204m のバルム峠 (Col de Balme) を越えてマルティニに達する。

ゴットハルト峠を最終の目的地にしていたから、この行程はかなりの迂回をしたことになる。モン・ブラン (Mont Blanc, 4,807m) を見るためであった。どの他の山頂よりも高く聳えるこの山にゲーテの心は動かされる。眺望の美しさはもとよりその神秘的な神々しさにひかれた。山頂は幅広く連なり周囲の星と共に輝いているので山の麓が大地に着いているとは思えないようだと言っている。

11月7日にマルティニからローヌ河 (Rhône) に沿ってレマン湖 (Lac Léman) に向うが途中のベー (Bex) で引返してしまう。偶然有名なピスヴァッシュ (Pissevache) の滝に向っていることが分った。夕方遅くこの滝のそばを通る。

Die Berge, das Tal und selbst der Himmel waren dunkel und dämmernd. Graulich und mit stillem Rauschen sah man den herabschießenden Strom von allen andern Gegenständen sich unterscheiden, man bemerkte fast gar keine Bewegung.

山も谷も空さえも暗く黄昏ていた。灰色で静かに音をたてて落下する流れはあらゆる他の対象と区別され、ほとんど動いていないようであった。(S.36. 以下「ファウスト」の他はすべて拙訳)

このようにこの滝について書いている。11月13日にゲーテの一行はゴットハルト (Gotthard) 山頂に到達した。旅の頂点でもあった。この地方はゲーテが知るスイスのうちで最も好きな興味をひく地方である。ゴッ

トハルトは2,108m の高さしかなくモンブランに比べて半分の高さもないが、他のすべての山々にまさる王者の風格がある。ゴットハルトを水源の一つにするロイス川 (Reuss) に沿ってゲーテ達は下る。具体名はあげられていないがこのロイス川の滝はゴットハルト附近が最も美しい形をしているという。黒い岩をかなりの幅で落下する滝の美しさにゲーテは心を奪われ、水が黒と白色の混じった大理石の上を流れ落ちるように見えるのであった。

2) 第3次旅行で9月17日にゲーテの一行はシャフハウゼンでクローネ旅館に宿泊した。翌18日にラインの滝を見るために早朝6時半に馬で出た。ゲーテのこの旅への意気込みが伝わるものがこの巻頭にある。

In der menschlichen Natur liegt ein heftiges Verlangen, zu allem, was wir sehen, Worte zu finden, und fast noch lebhafter ist die Begierde, dasjenige mit Augen zu sehen, was wir beschreiben hören.

人間の本性には我われが見るすべてのものに対して言葉を見つけない激しい欲望がある。我われが耳にするものを目で見たいという情熱はさらに激しい。(S.172)

目で見たり耳で聞いたことを文章にしたいという意欲的な目的を持って滝の見学をした。ゲーテの出発時間は早い。第2次の旅行では日付の次に早朝・朝・正午・昼頃・夕・晩・夜とあることが多く時間が入っていてもそれはおよそ9時頃とか10時頃等となっていたものだ。しかしこの第3次の旅では出発時間が明示されていた。正確さを記録するためと読者を意識した書き方なのであろうか。6時半・7時・8時・8時半が多い。具体的な時間が記入されていない場合には「早朝」とある。

ラインの滝の水煙が霧とまじり上昇する様子を馬からおりてゲエテは石灰岩の上から見ていた。水の流れが最初は緑色に見えるがそれが泡立ち少し緋色にみえてくる。

落下の力 (Gewalt des Sturzes), 力が弱まることのないような無尽蔵 (Unerschöpfbarkeit als wie ein Unnachlassen der Kraft), 破壊 (Zerstörung), 滞留 (Bleiben), 継続 (Dauern), 運動 (Bewegung), 落下直後の静寂 (unmittelbare Ruhe nach dem Fall)。このようにゲエテは名詞を並べる。動詞を使わないことが、殊更にこの時のゲエテの心の動きを表しているよう。水底から大量に噴き上がる飛沫は細い水煙を背景にして鮮かに虹が半円を描いている。滝の動的運動と虹の静的な美の対比にゲエテは感興を覚えるのであった。

Das Meer gebiert ein Meer. (海が海を生み出す。S.175) 大洋の源泉を創作しようとする時にはこのように叙述しなければならないともゲエテは言う。

3) この翌18日にはゲエテはラインの滝を1日に2度見学している。早朝と午後の3時であった。午後の見学でゲエテは色彩の変化を指摘している。夕日に照らされた滝は美しい。比較的深い流れの緑色は朝と同じように生きいきとしていたが、泡や水煙の紫がかかった緋色はずっと生きいきとしているという。さらに滝に近づいてみる。色彩の微妙な変化がある。水をかぶる大きな岩から虹が弧を描いて下るように見えるのは虹がほとぼしる泡の飛沫の中に生ずるからであるという。沈みゆく太陽が水の流れの一部を黄色にしたが、深い流れは緑色に見えずすべての泡と、もやは明るく緋色に染っていた。太陽が沈む瞬間の色彩の微妙な変化はもっとすばらしいとゲエテは思うのであった。見物人はこの滝の威力に圧倒されてしまう。滝の威力とはとりもなおさず自然の躍動であり驚異と畏

怖の念を起こさせるものであろう。第2次の旅で見たラウターブルンネンの滝の印象から生れた「水の上の霊たちの歌」の第一節を引用して結びとする。

Des Menschen Seele

Gleicht dem Wasser:

Vom Himmel kommt es,

Zum Himmel steigt es,

und wieder nieder

Zur Erde muß es,

Ewig wechselnd. (Goethes Werke Bd.1.S.143)

人間の魂は水に似ている

空から来て 空にのぼる

そしてまた 大地に下り

永遠に変転しながら。

ゲーテの滝への観察が凝縮されているよう。

(2) 岩石（鉱物）

1) 第2次の旅行ではゲーテの一行はバーゼルからスイスに入っている。ここからジュネーブまでスイスとフランスを分けるジュラ山脈 (Jura) の南を流れるビルス川 (Birs) に沿って進む。谷川に並行する道の両側には断崖が迫っている。岩壁が垂直に切り立つ。巨大な岩盤が川と道に斜めにくい込んでいたり岩塊が重なり合っていたり離れていた。岩山の尾根は丸かったり、とがったり、植物におおわれたり、植物が生えていなかったりする。山頂が裸で大胆にこちら側に見えたり、岩壁や谷底に風化した裂け目が入りまじる。およそゲーテが這った山行の景観

である。

10月27日にジュネーブでゲーテはこう記している。ジュラ山脈は石灰岩の高地で太古の水流の作用が見られるので、ヴァレー・ドゥ・ジュール (la Vallée de Joux) と呼ばれている。「山の谷」である。

ゲーテは科学者でもあり特に鉱物・植物・動物・形態学・色彩論にすぐれた業績をあげている。スイス旅行でゲーテはかなりの数の岩石(鉱物)類を採集していた。第3次の旅の9月25日(月)にチューリヒ湖畔のシュテーファから枢密顧問官フォークト氏への手紙で「鉱物学や地質学の趣味もこの途方もないくらい広がる自然現象が足元にあるのでたやすくなくなった。」と書いているほどであった。岩石(鉱物)の描写を順次挙げてみよう。

第2次の旅の11月6日ヴァリスのマルティニでの日記から：でこぼこだらけの荒れた道をおりて、古いトウヒの森(Fichtenwald)を通ったが、これは片麻岩(Gneis)の岩盤(Felsplatten)に根を下していた。(S.31)

翌7日昼頃、サンモーリスにて：道端で私たちは多くの花崗岩(Granit)や片麻岩を観察しました。それらはさまざまな相違にもかかわらずすべて一つの起源であるように見えた。(S.34)

2) 第3次の旅行から

1797年9月18日朝：ラウフェン。馬からおりて石灰岩(Kalkfelsen)の上に立つ。(S.174)

9月28日木曜日：チューリヒ湖畔のシュテーファから船でゲーテの一行は対岸のリヒターズヴィールに上る。その附近の情景をゲーテは見てドイツ中部のハールツ山地の岩石との比較をしている。

Wir gingen Richterswil hinauf und fanden mehrere neue Häuser. Am Wege fanden wir die grauen und roten Platten und andere entschiedene Brekzien zum Gebrauche hingeschafft. Die grauen Platten haben in ihren Abwechslungen viel Ähnlichkeit mit der Harzer grauen Wacke, indem sie bald porphyr-, bald brekzienartig erscheinen. (S.192)

私たちはリヒターズヴィールの町をのほり多くの新しい家々を見ました。道端には灰色で赤味がかった板石や他にはっきりした角礫岩が使うために運ばれてあった。灰色の板石は時には斑岩で時には角礫岩のように見えるのでその変化の点ではハールツ山地の灰色の硬砂岩とよく類似している。

又別の場所で：

Wir fanden einen schönen Mandelstein als Stufe. (S.192)

私たちは段状のすばらしい晶洞石を見つけた。

ズィール (Sihl) 川の川岸の近くで：

; links fand sich ein schwarzes Quarzgestein von der größten Festigkeit, mit Schwefelkies durchsetzt, in großen Wacken. (S.194)

左側には最大の硬度の黒い石英があった。

黄鉄鉱が混じり大きな塊をなしていた。

9月28日はアインズイーデルンの教会の前にある「孔雀館」(Zum Pfauen) に一行は泊り、翌日聖ミカエルの祝日 (Michaelstage) にこの教会へ行く。ここの博物標本室を見学した。：

Ingleichen schöne Adularien, ein Granat mit natürlichen Facetten von Mittelgröße. (S.195)

同様に美しい氷長石、自然の切り子面のついた中ぐらいの大きさの石

榴石もあった。アルプ川 (Alp) の谷の小径を行き川原をわたる。

Sie (Die Alp) bringt meist Kalk, wenig Sandstein, einige Stücke sehr festen und serpentinartigen Gesteines. (S.195)

アルプ川はたいてい石灰岩を運んでくる。

砂岩は少なく、いくつかの固い蛇紋岩のような岩石である。

さらに険しい道を登る。

Rötliches Tongestein. Graues schiefriges Tongestein, mit ganz feinen Pflanzenabdrücken. (S.196)

赤味がかった粘土岩。非常にこまかい植物の押型のついた灰色のスレート状の粘土岩が目に入る。

9月30日シュヴィーツのムオタ川 (Muota) の近くでみたもの：

Granitbröcke in den Mauern. (S.197)

石垣に花崗岩の塊がある。

10月1日アルトドルフで：

Das Zickzack der Felslager erscheint wieder. An die Reuß.

Granitgeschiebe. (S.199)

岩床のジクザクが再び現われる。ロイス川へでる。花崗岩の玉石。

Zusammengestürzte Massen Gneis. (S.200)

くずれた大量の片麻岩。

道は上り坂となる。

Wir traten unsern Weg nach dem Gotthard an.

Schiefricht Talkgestein. (S.200)

私たちはゴットハルトへの道を進んだ。

斜めになった石鱈石。

10月3日ホスペンタールを出発してカプチン派の宿坊を管理するローレンツ神父を訪ねた。その途次目にしたもの：

Glimmerschiefer mit vielen und schönem Quarz. (S.202)

たくさんのきれいな石英を含んだ雲母片岩。

ゲーテはローレンツ神父と神父のもとにいる青年と鉱物学の流行について話す。

Mineralogische Moden : erst fragte man nach Quarzkristallen, dann nach Feldspäten, darauf nach Adularien und jetzt nach roten Schörlen (Titanit). (S.203)

鉱物学の流行 : 初めに水晶結晶体、次に長石それから氷長石を求めそして今は赤味がかかった黒電気石 (チタン石) が求められている。

すでに18世紀にこのように鉱物マニアの存在があったとは時代を越えたものが感じられる。10月17日にゲーテはシュテューファからテュービンゲンのコッタ氏 (Johann Friedrich, 1764-1832) への手紙ではゴットハルトの冬景色を見ながらこのイタリアのミラノに続く峠を通った。鉱物学だけがここでは興味を引いたことを伝えている。この日もう2通手紙をかいている。枢密顧問官のフォークト氏には今回の旅で大いに岩石を叩いてきたことと大量の岩石を持帰ることを知らせた。数100キロもあるような氷長石 (Adularien) の真中にすわると我慢できないのであった。いくつか知られている物の中には、多少珍しくて美しい物を持帰るといことも書いている。ヴァイマルのアウグスト公への手紙では自分で描いた素描をそえてチューリヒ湖周辺の耕作のすばらしさを伝えた。

(3) 雲と色彩

1) スイスの自然は山と湖、谷と川に代表されよう。次にゲーテの眼は

地上のものから大空へと向けられた。山岳地方の雲の種類や動きには独特のものがあり詩人にとっては神の恵みにも値しよう。色彩豊かな雲の形態、水の色、岩石（鉱物）の色とゲートは無機物に色彩をつけることによって有機的な躍動感を与えている。旅の進行に合わせて雲を追ってみる。

第2次旅行の11月3日サヴォワ地方のクリューズで：

Wir hatten seit früh etwas Regen, wenigstens auf die Nacht, befürchtet, aber die Wolken verließen nach und nach die Berge und teilten sich in Schäfchen, die uns schon mehr ein gutes Zeichen gewesen. (S.21)

私たちは朝から多少の雨を少なくとも夜には懸念していたが雲は次第に山を離れてそして分れて絹積雲（羊雲）となりそれは私たちにとってはむしろ吉兆であった。

この先に、

空気は9月の初めのように暖かく景色のすばらしい地方であることがでてくる。風景描写の中でゲートの色彩感覚の豊かさが随所に見られる。

, noch viele Bäume grün, die meisten braungelb, wenige ganz kahl, die Saat hochgrün, die Berge im Abendrot rosenfarb ins Violette, und diese Farben auf großen, schönen, gefälligen Formen der Landschaft. (S.22)

まだ多くの木々は緑であるが、たいていは黄褐色で少しのものは全く葉がなかった。発芽した苗が青々として、夕焼けの山々はバラ色から紫色になりこれらの色彩が景色の大きなきれいな快い形になっていました。

11月4日シャモニで：

Wir ließen Sallanches in einem schönen offenen Tale hinter uns,

der Himmel hatte sich während unsrer Mittagsrast mit weißen Schäfchen überzogen, von denen ich hier eine besondere Anmerkung machen muß. (S.24)

私たちは美しい開けた谷間のサランシュをあとにした。空には昼食休みの間に白い絹積雲が広がっていた。その雲について私はここで特別のコメントをしなければなりません。

晴れた日にゲーテの一行がベルン高地の氷山から絹積雲が美しく上昇するのを見た時の様子。

, und diese ganz feinen Dünste von einer leichten Luft, wie eine Schaumwolle, durch die Atmosphäre gekämmt würden. (S.24)

微風によってこの微細な蒸気が羊の泡だつような毛のように大気によって櫛けずられたようでした。

珍しい大気の現象はまだある。

11月6日早朝シャモニで：

Die Nebel, die sich bewegen und sich an einigen Orten brechen, lassen wie durch Tagelöcher den blauen Himmel sehen und zugleich die Gipfel der Berge, die oben, über unsrer Dunstdecke, von der Morgensonne beschienen werden. (S.29)

動く霧がいくつかの場所できれ天窓から見るように青い空がみえ、また同時に山々の頂きがもやの天井の上に朝日に照されている。

これがゲーテたちの目を楽しませたのであった。

2) 11月9日ゲムミ山麓のロイカー・パートでゲーテは小さな板張りの家に泊る。天井が低く狭いこの家の戸口に立って美しい雲の様子をみて

いる。まだ夜になっていなかったが雲が交互に空を覆い暗くする。深い峡谷から上昇してくる雲が山の最高の頂きに達する。これに引きつけられて雲は濃くなり寒気に包まれて雪となって降ってくるように見える。ゲートルは高い場所でこの雲の動きを見ていたが雲の動きで「泉の中にいる」ような気になったりするのには口では言えない寂しさを誘うと言う。巨大な岩を覆いかくしたり岩を幽霊のように見せたりする雲は陰うつな気分にはさせるともいう。雲のこのような動きを観察しているとゲートルの心は予感で満ちてくる。大気の不思議な現象にすぎない雲は平地ではよそよそしくてこの世のものとは思えないものがある。さらにゲートルは雲は過客 (Gäste) としてあるいは渡鳥 (Streichvögel) として、他の空の下で生れあちこち我々の地方を一瞬通過して行くにすぎないとも言う。
; als prächtige Teppiche, womit die Götter ihre Herrlichkeit von unsern Augen verschließen. (S.43)

神々が我々の目の前のその栄光を閉ざしておくための華やかな絨緞として雲をつくったともいう。

『ファウスト』第2部第4幕「高山」に雲の情景が出てくる。ファウストの台詞であった。

もっとも深い寂寥の境を脚下に見ながら、おれは用心ぶかくこの頂上の岩端に足をおろす。

晴れた日に、陸や海をこえて静かにおれを、はこんできてくれた雲の乗物には暇をやった。

雲は散じることなく、徐ろにおれから遠ざかる。

その群は丸まった列をなして東の方へ向ってゆく。

れは驚き、且つ感歎しつつ眼でそれを追う。

雲はさまよいながら波を打って変化する。

だが何かの形をとるらしい。——そうだ、眼の迷いではない。——

(10039-10047) (相良守峯訳)

ゲーテは空の雲の動きと地上の人間の営みを創造の世界で重ねた。自然界の雲はゲーテの内奥に迫るものが少なからずあったと言えようか。

(4) 植物

1) 第2次の旅でゲーテはバーゼルからジュラ山脈の南東部の谷を行く。ビルス川 (Birs) を遡りビール湖 (Bieler See) に出てヌーシャテル湖 (Lac de Neuchâtel) を右手に見ながらレマン湖 (Lac Lemán) の湖畔を行きジュネーブにきた。ジュラ山地の南麓の森林地帯であった。この先順次出てくる植物をあげてみる。

10月27日ジュネーブで：

Durch Fichtenwälder stiegen wir weiter den Jura hinan, und sahen den See in Duft und den Widerschein des Mondes darin.
(S.13)

トウヒの森を抜けてさらにジュラ山地に上り、もやの中の湖とそこに反射した月の光を見ました。

ゲーテが馬に乗って旅を続ける情景が浮かばれてこよう。

11月4日アルヴ川沿いにあるサランシュで：手前のバルムの村でまず小径は崩れた石灰岩の碎石をのぼるのであったがそれが険しい岩壁の下に堆積したものでハシバミ (Hasel)とブナ (Buchen)の灌木が生い繁っていた。落葉低木のハシバミと落葉高木のブナが混じる広葉樹林帯である。

11月13日ゴットハルト山頂のカプチン派の宿坊にて：ウルゼルン溪谷 (Urserntal) を下って行くと美しい牧草地があった。その先の川辺

に見られた。; Büsche von Salweiden fassen den Bach ein, (S.64)
ヤマネコヤナギの灌木が小川沿いに茂る。

2) 第3次の旅9月18日ゲートはシャフハウゼンからスイスに入る。ここでラインの滝の近くのヴェールトの小城を見学した。その帰り道で「だん草」(Mangold)をみた。この種子を持ち帰って来年の夏にヴィーラント(Christoph Martin Wieland, 1733-1813)にごちそうしようとした。アカザ科の2年草は四季いつでも食用に出来るものだった。

9月19日夕方6時頃ゲートはシャフハウゼンからチューリヒに向う。翌日好天にも恵れてチューリヒ湖畔へ出かけた。午前中は城跡の高い菩提樹(Linden)の下ですごす。このスイス旅行に菩提樹は珍しい。石灰質や原生岩石の土壤が広がるスイスには各地にこの土壤を好む菩提樹が見られたはずである。

9月28日木曜日にゲートの一行は8時にチューリヒ湖畔のシュテーファから対岸の町へ行く。このリヒタースヴィールでは多くの新しい家や肥沃な谷をみる。そこに高いクルミの木(Nußbäume)がある。この木はこの旅の途次によく出てきた。寒冷地に自生するものであり小川の岸辺とくに水車小屋のそばで似合う木である。種子が食用となることから多くみられる理由がわかる。9月28日木曜日:

Der Fußpfad führt an einer Reihe von zehn Eichen vorbei.
(S.192) 歩道は10本のカシワの木が一行に沿って通じている。

リヒタースヴィール→ヒュッテンに向う。放牧地(Trift), いぐさ(Binsen), しだ(Farnkraut), やはり美しい桜(doch schöne Kirschbäume)が出てくる。10時半にヒュッテンにゲートの一行は到着。当地の牧師のバイエル氏がここから同行した。ゲート達がりっぱな西洋ひいらぎ(Stechpalmen)に気がつくとバイエル氏はもっと大き

い男の太股ほどもあり約12フィートもあるひいらぎを見つけたことがあると言う。

10月2日ヴァセンを7時に出発しゴットハルト峠を目指す。夕方8時すぎにゲェシェネンに到着する。ロイス川沿いの険しい坂道を登る。ここで非常に美しい実をつけたななかまど (Vogelbeerbaum) を見た。トウヒは全く見えなくなる。これまでの行程ではトウヒの群がよく目についたが植物地理学的にみて高距段階があがったための植生の変化である。高度が針葉樹林段階をこえて2500mをこえる万年雪の下限の段階に達したものであろう。

10月8日、日曜日8時にツークを出発し帰路につく。ツーク湖とチューリヒ湖の間は短い。ミッテルラント地域 (Mittelland) のほぼまん中である。なだらかな丘陵と浅い谷が続くが平地が多く果樹園や牧場がみられる。ここにあるバールの町でゲーテの目についたもの。

Gute Wiesen, Baumstücke, nasse Wiesen, Weiden, Erle.

Auf den besten Wiesen wächst viel Leontodon. (S.210)

良好な牧草地、果樹園、湿った草地、柳、ハンノキ。最良の牧草地には多くのタンポポが生えている。

ハンノキは岸边や川沿いの緑野、崖下に堆積した岩屑さらに湿地草原、石灰質の湿めった山の斜面を好むものであった。

この第3次の旅には植物の記述はわずかしか見あたらない。ナナカマド、クルミ、リンゴ、クリ、ブドウ、ニンジン (gelbe Rüben)、カブラ (weiße Rüben)、それに具体名のない酸性の草 (saures Gras) と低いアシ類 (niedres Röhrich) 等である。山国の旅であるのに高山植物とくに山野草が出てこない。植物学に造詣の深いゲーテにはAlpに咲く草花は興味がなかったようだ。

(5) 山・谷・峠

1) 山岳地方の旅であったからゲータらは時には馬をおりて歩くことも多かった。いくつか名の知れた高峰を目にしたたり、雲が立ちのぼり雪をかぶった連峰を仰ぎ見ながらの移動が続いた。第2次の11月4日バルムで洞窟を探検したあとサランシュを経由してゲータの一行は暗くなってからシャモニの谷に入る。

Nur die großen Massen waren uns sichtbar. (S.25)

目の前に大きな塊が見えるだけでした。

この大きな山の塊がモン・ブラン (Mont Blanc, 4807m) であった。どの山頂よりも高く聳えていてピラミッドのようであるとゲータは言う。星が次々に空にのぼり空に説明のできないような光が認められた。明るい天の川ほどの輝きはなかったがゲータたちの目をひいた。場所を変えてみると蛍の光に似たもので神秘的な光をおびていた。これが白い巨峰モン・ブランの山頂であったとゲータは書いている。

シャモニの谷 (das Tal Chamonix) は山間にあって南北にのびて非常に高いところにある。その特徴は中央部に平地がほとんどなくて盆地のように土地がアルヴ川からじかに山の頂上にくっついているようであった。氷の大きな塊が谷の東側の壁となり谷の全長にわたって氷河が7本さがっている。

11月8日夜明け前にマルティニ→スイオンに向う。ゲータはヴァリスの谷 (Wallistal) のすばらしい眺めに心を奪れる。この眺めのおかげで多くの良い考えが喚起されたという。右手にマッターホルン (Matterhorn, 4478m) が目に入るはずであったがこの山の言及はなかった。

第3次の旅10月2日月曜日にヴァセンからゴットハルト峠を目指す。

Um sieben Uhr ab, die Nebel zerteilten sich, Schatten der Berggipfel in den Wolken. (S.200)

7時に出発。霧が散り山頂が雲の中へ影をおとす。

この情景はハルツ山地のプロッケン山の現象を思い起こさせよう。太陽が背後から照りつけてくるとちょうど反対側の雲や霧の上に自分の姿が映り頭部が中央になり虹のような美しい光輪が現われる。

ゴットハルト峠に近付くにつれて植物は減少する。堂々とした滝の前を通りすぎる。霧をすかしてみると高い所に長い水の帯が流れ落ちているのが見える。高く築かれたピラミッドのような花崗岩、ばらばらの岩塊の滑らかな壁、オベリスク状のものなどがある。太陽の光の中の前方に雪山の険しい円形劇場 (Amphitheater) があるとゲーテは想像をめぐらすのであった。

2) 『ファウスト』第2部第4幕「高山」をみてみよう。ファウストがメフィストに言う。

Faust. Gebirgesmasse bleibt mir edel-stumm,
Ich frage nicht woher und nicht warum.
Als die Natur sich in sich selbst gegründet,
Da hat sie rein den Erdball abgegründet,
Der Gipfel sich, der Schluchten sich erfreut
Und Fels an Fels und Berg an Berg gereiht,
Die Hügel dann bequem hinabgebildet,
Mit saftem Zug sie in das Tal gemildet.
Da grünt's und wächst's, und um sich zu erfreuen,
Bedarf sie nicht der tollen Strudeleien. (10095-10104)

やまなみ

山脈はおれに対し気高くうち黙している。

どうして出来たか、何故か、などとおれは問わぬ。

自然が自分自身の中に自分の基礎を築いたとき、

地球を清らかに丸くつくった。そして、

峯や谷にも興味をもち、

岩に岩を、山に山をならべたてた。

それから丘を気持よく下へむかって傾斜させ、

なだらかな線を描きながら、谷に至って平らにした。

そこに草木が緑に芽ばえて成長する。自然は、

自分で楽しむのに狂気じみた天変地異を必要としない。(相良守峯訳)

この情景はゲーテの這ったスイスの自然の景観であろう。峨峨として屹立する岩の峰と重畳たる山並はゲーテの心の底に晩年まであり続けたと言えよう。

ゴットハルトはスイスの最高峰ではなかったがゲーテはスイスのすべての地方のうちで最も好きな最も興味深い地方なのであった。(第2次11月13日) モン・ブラン遙かに高い。

; doch behauptet er (=Gotthard) den Rang eines königlichen Gebirges über alle andere, weil die größten Gebirgsketten bei ihm zusammenlaufen und sich an ihn lehnen. (S.56)

しかしゴットハルトはすべて他の山々にまさる王者の山の地位を主張している。そのわけは最大の山の列がこの近くに集り、ゴットハルトによりかかっているからである。

ゲーテの3度にわたるスイスの旅は自分の目で未知の国を見て自国になり未知のものを知ることであった。スイスが地理的にヴァイマルからイ

タリアへの中間点に位置したことが第1次、第2次のスイス旅行後のイタリア行きを心理的にも物理的にも容易にさせた面も少なからずあろう。スイスの旅は専ら自然に目が向いていたがイタリア旅行では人間、多様多様な事物の観察をしていた。博物学的好奇心が多方面に働いた。自ら目にするものの中に自己を再発見することであった。

しかしスイス旅行の収穫は自然観察と自然の造形物の採集と記録がまず挙げられるが他にそこに住む人々の家の構造や生活を見たことにもある。今日の地域研究とも考えられようか。他にもまだこの旅の収穫がある。旧知の人々と旧交を暖めたことと新たに知己を得たこともゲーテにとっては大きな成果と見做すことができるのである。

Texte : Johann Wolfgang von Goethe 12

GEDENKAUSGABE DER WERKE, BRIEFE UND
GESPRÄCHE 28. AUGUST 1949
ARTEMIS VERLAG ZÜRICH UND STUTTGART

参考及び引用文献 :

Goethes Leben und Werk in Daten und Bildern
Herausgegeben von Bernhard Gajek und
Franz Götting unter Mitwirkung von Jörn Göres
(Insel-Verlag Frankfurt am Main 1966)

Heinz Nicolai Zeittafel zu Goethes Leben und Werk
(C.H.Beck München 1976)

GOETHE FAUST Kommentiert von Erich Trunz
(Christian Wegner Verlag, Hamburg 1963)

GOETHE WERKE Bd.I
(Christian Wegner Verlag, Hamburg 1969)

ゲーテ全集 第12巻 (潮出版社, 1979)

ゲーテ『ファウスト』相良守峯訳

(ダヴィド社, 1966)

世界地理7 ヨーロッパⅡ

(朝倉書店, 1977)

世界再発見4 イギリス・中央ヨーロッパ (同朋社出版,
1992)

エコロン 自然シリーズ 岩石鉱物

木下亀城・小川留太郎共著

(保育社, 1995)

野外ハンドブック・5 雲

(山と溪谷社, 1994)

ミシュラン 道路地図スイス

(丸善, 1994)

スイス '95~'96 (JTB, 1995)